

深い御憐れみをもって 背きの罪をぬぐってください

この詩は有名な悔い改めの詩篇です。まず、本文を朗読してみましょう。日本語新共同訳でも、「罪」「咎」が(3節、4節2回、5節2回、6節「悪事」を含め2回、7節2回、9節、11節2回)重ねて登場しています。この詩編は「ダビデがバト・シェバと通じたので預言者ナタンがダビデのもとに来たとき」の歌であると特定されています。罪や咎を一般化、抽象化しないためにも、本詩の背後の物語を略実しておきます。前代未聞のスキャンダルです。ユダヤ人の王国復活を求める人の目で見ればダビデは理想の王かも知れませんが、信仰を持たない普通の人が聖書を読めばダビデは、このような酷い、人を次々に陥れる人がいるのかというほど嫌な奴です。それでもこのような数々の物語を改竄？せず(語らないことなどによって、間接的改竄もしているでしょうが)、王の悪事を語っているところが聖書の凄い処かも知れません。しかし、預言者ナタンの叱責にダビデは「悔い改めた」！この一点がダビデをダビデにしているのではないのでしょうか。「しかし、神の求めるいけにえは/打ち砕かれた霊。打ち砕かれ悔いる心を、神よ、あなたは侮られません。」(19節)

1. バト・シェバ事件

ダビデの人を騙す、狂言師のような罪を数え上げればきりがないので、バト・シェバ事件にだけ簡単に触れておきます。北(ヤコブの伝統)の王サウルが南北統一を目指し、南のダビデがその事業を継ぐのです。そのために南の伝統(アブラハム、イサク伝承の担い手たち)を継ぐダビデは「国家」統一のために、戦場に将軍たちを派遣し、自らは宮殿で昼寝をしています。目を覚ますと、美しい女性が水浴びしているのが見えました。(II サムエル 11:2)。性的欲望と権力行使に目がくらみ、力で彼女を自分のものにします。第一の罪は、部下を戦争に送り出しているさ中にリーダーがこのようなことをしたことです。第二の罪は、独身女性ならいざ知らず？人の妻であることを確かめてした悪事です。これだけなら、醜い人間の欲望の問題であるかも知れません。第三に、権力をもってそれを実現したことの罪は大きいでしょう。ところが、バト・シェバが妊娠したことが分かったと彼女の夫将軍ウリヤに休暇を与え、家に帰らせ、妻と性行為をさせ、ダビデが妊娠させたのを誤魔化そうと策略します。第四の罪です。なんという悪だくみでしょうか。自分の悪を誤魔化すために、第五の罪はさらに醜いです。清廉なウリヤは部下たちが闘っているさ中、休暇を取ることを辞退します。そこで、更に更に困ったダビデは次の策謀を巡らします。ウリヤを敵の強力な部隊のいる最前線に送り、戦死させるのです。ウリヤのダビデへの忠誠を見事裏切ったのです。「彼を残して退却せよ」(15節)とダビデが命令しているので、味方が殺したのかも知れません。バト・シェバは夫の戦死を悲しみますが、権力をもったダビデを拒むことはできず、ダビデの妻となります。「ダビデのしたことは主の御心にかなわなかった」(27節)と明言しています。妊娠した子は死に、次に生まれた子ソロモンが多くの兄たちを退け、バト・シェバの願いにしたがって王となります。当時の相続の秩序の無視です。アブサロムの謀反も父親のこのようないい加減さと関連しているでしょう。また、ダビデを助けた軍長ヨアブはこのスキャンダル(無実のウリヤ殺し)を依頼され、ダビデの弱みを握っていたので、ソロモンに王位を譲る際、自分で手を汚さず、ヨアブを殺せとソロモンに命じます。このやり方も卑怯な振る舞いです。まあ、味方の軍隊より反乱者アブサロムを嘆く王の姿に決定的な幻滅を覚えたヨアブを、そして、どこか非情で多くの人の血を流したヨアブ

を疎んだこともあったでしょうが…。

2. ダビデの悔い改め

その他、サウルの末娘ミカル（ダビデに恋をして父を裏切りダビデを救ったこともある）を幸せにできなかったこと、ナバルは愚かであったとはいえ、また、心筋梗塞で急死したこともあります。彼の妻、美女アビガエルを妻にしたこと（ナバルはIサムエル 25:2-43）も感心しません。このような人間でしたが、主から派遣された預言者ナタンの叱責にダビデは悔い改めたと言われています。その時に、彼は詩編 51 を歌ったことになっています。私であれば、預言者ナタンをも殺すかも知れません。それをせず、悔い改めた一点でダビデはダビデでした。このような重複した悪事の結果、詩編 51 編では、そのような人が「あなたに背いている者に、罪人が御もとに帰るように」（15 節）などおこがましいですが、「わたしを憐れんでください (hännēni)。御慈しみをもって(kəhasdekā。深い御憐れみをもって (rahāmekā)背きの罪をぬぐってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください」(3, 4 節)、そして、9, 11, 12, 13, 14, 16 節の願いは彼の心からの叫びであり、祈りであったことでしょう。

3. シオン伝承の恐ろしさと人間の罪

やがて、預言者ナタンはバト・シェバと組んで、ソロモンの異母兄アドニヤ派と争い、ソロモンを王位につけますが、その時のナタンの想いを知りたいものです。どこかで倫理性を超えて王権を期待するシオン伝説、ダビデ神話の恐ろしさを覚えます。イザヤも王宮の預言者でありましたが、預言者の中には王国への批判者が沢山います。このような文脈から主イエスがなぜ政治的・軍事的力を背景とした「ダビデの子」メシアと呼ばれることを避け、僕の道を歩まれたのか、が理解できます。

ダビデの邪悪さを批判しましたが、人は「50歩、100歩」です。100歩逃げた人を50歩逃げた人が笑うのも醜悪です。人間は皆罪人であるという洞察は、キリストによって一方的に誰もが神と和解させられているという信仰と共に、人間を連帯させるのでしょうか！